

余白の風

求道詩歌でキリスト教
二〇一〇年六月発行
第一七四号
毎月一回二〇日発行

井上洋治神父のうた

夕焼 小焼の
あかとんぼ

御神風さまにつつまれて

夕べのお祈り捧げてる

南無の祈りの美しさ

澄んだとんぼの姿から

きこえてくるよ子守うた

いろいろいろい夕焼の

お空を流れる子守うた

アツバの姿を子守うたに

*5月8日、井上神父司祭叙階金祝記念として、出席者に贈呈された神父自筆の「かえうた讚美歌 原詩―夕焼け小焼のあかとんぼ―」。ミサ後に皆で唱和しました。
御神風―聖霊のなかで、あかとんぼが 南無アツバの祈りをささげます。日本人キリスト者としての大安心は、こうしたうたのなかに如実に表れています。

会員作品とエッセイ（*主宰句評）

栗野市 長谷川末子

短か夜も難病の友支へらる

句の友の逆縁の報白牡丹

さへずりや生を給はる喜びを

七十五才

足腰弱くなつて来た 世渡り上手になつて来た 困りも少し見えて来た 打たれ強くなつて来た ど忘れ失敗増えて来た 三度の食と住む所着る物すべて与えられ今生かされるこの恵み。死ぬ日はいつか知らないが 今日一日の有難さ しあわせ者感謝する

*その年代にならなければ見えてこないものがあるのですね。

蓮田市 平田栄一

はや父の一周忌となり葬式と同じ晴れ日の同じ顔ぶれ

夜はすぐ眠くなりすぐ目が覚めるスワンのごとく何かを待ちて

苦しみは主の苦しみと思ひ為せ喜びの実は天に結べり

（ペトロ4・7〜1 ヨハネ1・16）

稲城市 石川れい子

南無アツバ

アツバ アツバ 南無アツバ／初めて集った聖堂に／あふれるばかりの人々が／井上洋治神父さまの／司祭叙階五十年／南無アツバのミサで歌ふなり／夕焼け小焼のあかとんぼ／御神風 おみかせ）さまにつつまれて／夕べのお祈り捧げてる／南無の祈りの美しさ／一人ひとりにおのづから／ご聖体をくださる神父さま／長いながい行列の／一番うしろの私も／対面できた うれしさに／元気百倍いただいて／アツバ アツバ 南無アツバ！と。／南無アツ

バ」と直筆の／お守り札が届きました／絹の袋につつまれて／企業戦士で同世代／五十年を生きた夫／病に伏した床の中／届いた手づくりお守りと／五月のある日でかけたなら／無事に一人で行きました／アツバ アツバ 南無アツバ

祈りの内にひとつです／日本人にはびつたり／祈りのことばをありがとう／アツバ アツバ 南無アツバ

井上洋治神父さまに感謝をこめて 二〇一〇年五月

薫風を入れて酔の飯艶を出し

*鮮やか、丁寧な金祝の情景が思い出されます。神父様もご主人もどうぞご自愛ください。

八王子市 井上文子

ひたむきに愛しましたと花の散る

あたふたと隙間で祈る主婦の日日

独り言増えて独りでないと知る

*独り言は祈りかもしれませんね。であれば、二人、三人……寂しくない。

金祝のミサ 練馬区 魚住るみ子

一人ひとりの名を呼び祈りたまふとふ御姿惚び胸にあふるる

人の業の罪をゆるして背を押す聖霊の風

わが上にしも

*この金祝は神父様はもとより、多くの人にとって意義深いものとなりました。感謝

柿若葉アツバの与ふ平和聴く

蕃薇散るや崩れる我を叱りつつ

更衣今ここにある生命かな

名古屋市 片岡惇子

*柿若葉、薔薇、更衣…季節の変化のなかで、アツバ御声を聴きつつ。

大和市 佐藤悦子

痛みつつ目覚める夜半の南無アツバ

待ちわびる夜明けのひかり南無アツバ

十字架にはほえむ御顔南無アツバ

南無アツバは懐かしい故郷の言葉…」（号）

実は、私が小学生の頃、故郷の農村で毎日外で遊んで夕方、家に帰る頃、アツバまたねー、とか、アツバねと言いつつながら、仲間の子供たちと別れていきまじた。今でしたら、バイバイ、さようなら、ということでしょう。不思議とどこかで聞いたことのあるなじみ深い言葉だと感じていました。何か関係があるのでしようか。おもしろいですね。

*広辞苑を引くと、あばよ（さあらばよ）からか）別れの時の挨拶。さようなら。」とありました。寅さんなんかがよく、じゃあな、あばよ！」って、くるっと背を向けて去っていく情景が浮かびますね。ちなみに、あつば 東北地方北部や長崎県・種子島で「母。」あば 東北地方北部で「母」というのもありました。興味深いです。

豊田市 佐藤淡丘

葉桜を抜けて弾ける乙女らは

緑陰にハートのトランプ忘れろし

雨合む花アカシアを掌で受ける

年を経るにつれて、聖母マリアのとりにしと慈しみに心を寄せるようになっていました。そんなとき、所属している教会が献堂三〇周年の記念行事として、マリア像を庭先に建てることになり、一年がかりでこの五月、聖母月にふさわしく、純白のマリア像が美しく建立されました。一番喜んだのは、教会学校の子供達と、そのお母さんでした。

〇〇ちゃん、また来週マリアさまに会いに来ましょ

うね。」ミサを終えた子供達は、マリア像にペコリと頭を下げ、去り去ってゆく姿はまことに微笑ましく、カトリック教会のよさを改めて確認したひとときでした。

*イエス様のなかにマリア性をみている井上神学は、エキュメニズムの中で大きな意味をもつものと思います。

「日天」5月号より

立川市 新堀邦司

落味噌に添へ懐かしき便りかな

入念に準備運動草青む

万象の動きはじめて春確か

*落味噌、運動、万象へ、目が外へ向いて行く明るい季節になりました。

求道詩歌のすすめ(抄)・余白

南無アツバミサ前小講話10-4-10 田谷ニヨラレ）およそ日本人なら、俳句や短歌や短い詩の1つ、2つは、学生時代でも作った、作らされた経験があるのではないでしょうか。まずそれを思い出して、日々の信仰生活——ミサにあがったり、聖書を読んだり、自然や人に触れ合って感じたことを、短い言葉でいいあらわしてみよう。独り言の日記のようでもいいのです。その場合、人様が見るとか、どこかに発表するとか、そういうことを考えない方がいいと思います。好きなように、好きな形で作る。

以前にもここで浄土真宗の妙好人の話をししました。浅原才一などの歌や八木重吉の詩などは、求道詩歌のいい見本だと思います。そして今なら、もし求道詩歌をやってみよう、という人がいた時、私がお手本として勧めるのは、井上神父様のアツバ賛句です。神父様はこんなことを意識してないだろうし、私がこんなことをいうのはまこと口はばったいのですが、神父様の句は私が提唱している「求道詩歌」を、はからずも最も良く具現しているように思うのです。たとえば、

朝 目覚め 命なりけり南無アツバ

皿洗い茶碗こわして南無アツバ

心傷つけてしまいなすすべもなく南無アツバ

これらは、短くて、やさしい言葉だけを使っています。だからだれでも「読共感」できる。それからリズム。ここでもう「南無アツバ」について説明する必要はないと思います。上句に自在な言葉（音数）をもつてきても、安定しています。このことは心情的にはどういふことかという、私たちの身の上にならなくても、最終的にアツバにお任せするんだ、という祈りになっていくのです。そしてなにより、ご自身の言葉で詠んでいる、ということ。それはすなわち日本人の血、素質から自ずと流れ出るところからアツバなり、イエスなりを詠うということ。このように、まさに私どもが行っている求道詩歌運動の目指す所を体現しているお歌なのです。

さて、昨年の12月の、このミサで神父様は、これからの日本のキリスト教への提言として、下からのキリスト論「神をアツバ」とらえる、テレジアの幼子の道」そして、「沈在神論」ということを上げておられました。これが、これに関して「風」2号0年夏秋号に次のような、神父様の言葉があります。

キリスト教は、決して、汎神論ではないけれども、しかし本質とはたらきを断絶する超越一神論ではなく、汎在神論（ペンエンティスム）と呼ばれるべきものなのだ、という東方神学に目覚めることが絶対に大切なことなのだと思われまふ。そこではじめて、歌道や俳句道が、キリスト信仰のなかで抹殺されることなく、その息を吹き返すことができるのだと思います。

ここには、汎在神論としてキリスト教を捉えることと、日本人の求道方法としての歌道や俳句道との相性が明確に述べられています。四半世紀にわたり、細々とですが私自身俳句や短歌と関わってきた、いまこの神父様のお言葉の意味が、少しですがわかってくるような気がします。と同時にまた、このような捉え方を今の日本のキリスト教の中で実現していくことの難しさも、感じつつあります。先ほどの神父様の3つの提言を実現するための一助ともなれば、自分としてはうれいことだなあと思っています。南無アツバ、南無アツバ、南無アツバ

*本誌は、井上洋治神父の提唱する日本人のキリスト信仰を生きるため、詩歌を中心として、共に道を求め、祈り合ったための会誌です。*原稿採査主宰一任*締切日毎月未必書*年会費二千円(送料共)*郵便振替口座 〇〇一七〇一三二六〇九〇九 平田栄一